

博士論文

Self-authorship の育成に向けた
野外運動を教材とした大学体育に関する研究
(要約版)

令和 2 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科

大学体育スポーツ高度化共同専攻

佐藤冬果

目次

第1章 序論

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の課題
- 第4節 操作的定義
- 第5節 研究の限界
- 第6節 倫理的配慮
- 第7節 本博士論文に関連する論文および報告

第2章 先行研究：Self-authorship の理論的背景の整理（研究1）

- 第1節 Self-authorship とは
- 第2節 Self-authorship の発達を促す教育実践
- 第3節 大学教育における大学体育としての野外教育
- 第4節 先行研究のまとめ

第3章 Self-authorship の構造の検討（研究2）

- 第1節 目的
- 第2節 Self-authorship 評価尺度の作成と構成概念の検討
- 第3節 Self-authorship 評価尺度の信頼性および妥当性の検討
- 第4節 Self-authorship 評価尺度得点の性差と年齢的变化の検討
- 第5節 まとめ

第4章 Self-authorship の育成を意図した授業の実践（研究3）

- 第1節 目的
- 第2節 体育授業の位置付け
- 第3節 Self-authorship の発達を促す体育授業モデル仮説
- 第4節 野外運動（春学期）の授業記録およびその経過
- 第5節 野外運動（秋学期）の授業記録およびその経過
- 第6節 まとめ

第5章 Self-authorship の育成を意図した授業の効果検証（研究4）

- 第1節 目的
- 第2節 方法
 - 1) 春学期授業の定量的検討（研究i）
 - 2) 秋学期授業の定量的検討（研究ii）
 - 3) 春学期授業の定性的検討（研究iii）
- 第3節 結果
- 第4節 考察
- 第5節 まとめ

第6章 Self-authorshipの獲得に影響を与える要因の検討（研究5）

第1節 目的

第2節 方法（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）

第3節 結果（結果図とストーリーライン、カテゴリー）

第4節 考察

第5節 まとめ

第7章 結論

第1節 研究の要約

第2節 本研究の意義

第3節 今後の課題

第4節 結語

引用文献

巻末資料

第1章 序論

大学教育における21世紀型能力育成の重要性が増している。21世紀型の学びを達成するためには、学修者は、社会通念や他者の意見等の「外的根拠」を無批判に受け入れる状態から、自分自身の「内的根拠」の確立に向けた外的根拠の批判的分析へと転換することが必要であることが指摘される(Hodge et al., 2009)。この「内的根拠」やそれを持つ能力は Self-authorship (以下、SA) と呼ばれ、「個人の信念、アイデンティティ、社会的関係を定義づける内的能力」(Baxter Magolda, 2001) と定義される。

SAの育成には構成主義的なアプローチが適しているとされるが、体育授業は、身体の直接経験を中心とし、自らの身体運動を通じた直接的な体験とその内省から学びを得るという構成主義教育のアプローチと親和性の高い構造をもつ。つまり、大学教育の中でも学生のSAを効果的に育成する場となる可能性があるが、国内外を問わず体育授業によるSA育成の取り組みはみられない。

なお本研究では実践事例として「野外運動」を教材とした大学体育授業を取り扱う。これまで、SA育成における野外教育の有効性がGass (2003) などによって示されており、野外教育の教育構造とSAの発達を促す教育構造の共通性が明らかになっている。本研究では、野外教育の理念のもと行われる体育授業を題材に構成主義的アプローチを用いた授業を展開することで受講生のSAの発達を促し、その詳細な検討から大学体育全般におけるSA育成に汎用可能な知見を得ることを目指す。

そこで本研究では、「集団での課題解決活動を含む野外運動の授業を題材に、Self-authorshipの発達を効果的に促進する大学体育授業モデルを構築する」ことを目的とし、以下の課題を設定した。

【課題1】 Self-authorshipの理論的背景の整理および構造の検討

研究1 Self-authorshipの理論的背景の整理

研究2 Self-authorshipの構造の検討

【課題2】 Self-authorshipの育成を意図した授業の実践および効果検証

研究3 Self-authorshipの育成を意図した授業の実践

研究4 Self-authorshipの育成を意図した授業の効果検証

【課題3】 授業による受講生のSelf-authorship発達に影響を与えた要因の検討

研究5 Self-authorship発達に寄与する要因の検討

第2章 先行研究：Self-authorshipの理論的背景の整理（研究1）

1) 目的

SAの理論的背景を整理し、大学体育によるSA育成の意味と可能性を検討すること。

2) 方法

SAの理論的基盤となったKegan (1994)の構造発達理論をはじめ、SAに関連する国内外の文献、および大学教育や教養教育、大学体育、体育教育、野外教育に関する文献研究を行い、大学体育および野外運動授業によるSA育成の意味と可能性を検討した。

3) 結果

Keganの構造発達理論から、SAの獲得は大学生世代における発達課題であることが確認された。またBaxter

Magoldaによって示されたSAの3側面や発達過程、発達を促す環境に関する研究成果を整理した。また、SAの発達に関わる要因や実践例等の論考を整理し、SAの発達を促す体育授業の構造は、支持的な指導者のもとで課題に取り組み、多様な他者との相互作用や葛藤を含む経験のなかで、経験に対する入念な内省を行い、自分自身で意思決定をし、責任ある個人として実際に行動することが求められるような挑戦的な状況を含む構造であると結論付けた。

第3章 Self-authorshipの構造の検討（研究2）

1) 目的

大学教育の体育授業場面で使用可能なSelf-authorship評価尺度を作成すること。

2) 方法

i) 質問項目の抽出

先行研究を参考に225項目を収集・作成した。類似の内容を問う項目の集約や表現の修正を行い、最終的に58項目のSA評価項目を選出した。

ii) 調査内容と調査対象

上記の58項目に加え、新井・佐藤（2000）の自己決定意識尺度25項目、鎌原ら（1982）のLocus of Control尺度18項目を含めた計101項目の質問紙を作成した。9校の大学および1校の高等学校において調査を行い、計1113名（ $M=19.1$ 歳、 $SD=1.43$ ）を因子分析の対象とした。性差および年齢的変化の検討には追加調査を実施し、16歳から22歳までの1529名（ $M=18.62$ 歳、 $SD=1.49$ ）を分析の対象とした。

iii) 分析

SA評価項目の得点について、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）による構造の分析、確認的因子分析による因子構造の妥当性の検討を行った。またCronbachの α 係数、再検査法、併存的妥当性の検討により、信頼性・妥当性の検討を行った。そして性別（2水準）×年齢（7水準）の二元配置分散分析により、性差と年齢的変化の検討を行った。

3) 結果

i) Self-authorship評価尺度の作成

探索的因子分析により「自己一致因子」、「対人的自立性因子」の2因子22項目を抽出した。自己一致因子は、信念や価値観などの自己の内的な根拠の理解やそれらに従った行動をとる能力について問う項目が含まれた。また、対人的自立性因子は、他者にいたずらに同調しない能力を問う項目が含まれた。確認的因子分析の結果、高い適合度が示された。

ii) 信頼性・妥当性の検討

SA評価尺度全体のCronbachの α 係数は.87であり、高い内的整合性が示された。また、高い再検査信頼性が確認された（ $r=.74$ ）。また他尺度との相関により併存的妥当性が確認された。

iii) 性差および年齢的変化の検討

SA評価尺度合計点および自己一致因子、対人的自立性因子のいずれにおいても性別および年齢の主効果が確認された。いずれにおいても男性が女性に比べて高い値を示し、おおよそ年齢が上がるにつれ高得点となる結果となった。以上は先行研究を支持する妥当な結果であった。

第4章 Self-authorshipの育成を意図した授業の実践（研究3）

1) 目的

SAの育成を意図した体育授業を実践し、指導内容や学生の様子に関する授業記録を作成する。

2) 方法

筑波大学応用体育「野外運動」においてSAの獲得が期待される構成主義型の授業を展開した。研究1の結果から作成されたSAの発達を促す体育授業モデル仮説（図1）に基づき、2019年度春学期の授業では、構成主義教育に基づく課題解決型野外活動を2クラスで実施した。秋学期の授業ではカヌーを教材に、1クラスでは教員が技術指導を行う従来型の授業を実施し、もう一方の授業では教員からの一斉指導は行わず、予め話し合いで決められた各週の担当者が練習メニューを作成し、準備運動から最後の反省会までのグループ活動を主導した。班毎の練習の後には班対抗のリレーを行い、技術を実践場面で試行した。その後に行われる反省会では、技術面や戦術面での課題について班毎に意見交換を行った。それらを基に翌週の担当者が班の練習メニューを考案・主導することを毎週繰り返した。

3) 結果

両授業の特徴を整理し、授業内容を詳細に記録した。

第5章 Self-authorshipの育成を意図した授業の効果検証（研究4）

1) 目的

SAの育成を意図した授業が受講生のSAに与える影響を検討し、授業モデルを評価すること。

2) 方法

春学期授業の定量的検討（研究i）、秋学期授業の定量的検討（研究ii）、春学期授業の定性的検討（研究iii）により検討した。研究iでは野外運動授業の受講生69名（2クラス）、球技系個人種目授業の受講生19名、表現系種目授業の受講生25名の計113名（男性60名、女性53名、 $M=19.34$ 歳、 $SD=0.53$ ）を対象に、研究iiでは野外運動授業実験群28名、野外運動授業対象群34名、球技系個人種目授業の受講生20名の計82名（男性40名、女性42名、 $M=20.04$ 歳、 $SD=0.73$ ）を対象に、研究2で作成したSA評価尺度を用いた質問紙調査を春学期と秋学期の授業前後（計4回）に実施した。研究iiiでは、野外運動授業受講生より提出された学期末レポート（ $N=80$ ）を対象とし、内容分析を行った。

3) 結果

研究iでは、合計点の時期×群の二要因分散分析の結果、交互作用が有意であり、単純主効果の検定の結果、野外運動群のみ授業後に1%水準で有意に得点が向上していた。自己一致因子においても同様の結果であったが、対人的自立性因子については有意な変化はみられなかった。研究iiでは、合計点の時期×群の二要因分散分析の結果、交互作用および主効果に有意な値は確認されなかった。因子ごとの得点も同様であった。研究iiiでは、約9割の野外運動授業受講生からSA発達に関連する学びについての記述が得られ、記述内容に関する内容分析の結果から、未知の課題との対峙や、達成に向けた試行錯誤の中で他者と自身の意見や能力を融合して解決方法を生み出した体験など、6カテゴリー、17サブカテゴリーに分類される体験を通じて、

「A. 適切に自己主張をする能力の発達」、「B. 自身の考えに基づいて主体的に行動する能力の発達」、「D. 主体的な問題解決能力の発達」という SA に関連する 4 つの学びが得られることが認められた。

第 6 章 Self-authorship の獲得に影響を与える要因の検討 (研究 5)

1) 目的

野外運動を教材とした体育授業を通じた SA 発達に寄与した要因を明らかにすること。

2) 方法

野外運動授業の受講生 10 名に対して、①野外運動授業に抱いていた期待と実際の感想、②授業での学びとその契機となった体験、③授業における学びの日常への転化についてインタビュー調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

3) 結果

インタビュー調査と M-GTA による分析の結果、50 の概念と 13 のカテゴリーが生成された。SA 発達につながる体験である〈SA 発達への体験プロセス〉、およびそれらの一連の体験に作用する〈SA 発達に寄与する外的要因〉、そして〈SA 発達に至る心的変容〉が示され、野外運動を教材とした大学体育授業における SA 発達のプロセスが示された。

そして、それらの体験は【学びへの興味の高まり】を軸に、自分自身とはどのような存在なのか、ということへの認識である【内的根拠の深まり】や、自分自身で学ぶことの価値を理解する【自立的な学びの価値理解】、自分自身の意見を発信することへの意欲である【対人的な自立】、そして多様な視点や在り方を受け入れる【多様性の受容】という〈SA 発達に至る心的変容〉を経て、SA の発達へと繋がることが示された。

第 7 章 結論

最後に、研究全体の概要および成果をまとめ、本研究の意義を整理した。そして今後の課題を挙げたうえで、大学体育によって SA を育成することは、現代日本の大学生が抱える課題にも働きかける、教養教育としての重要な役割の一つであることを提示した。

引用文献

- Baxter Magolda M. B. (2001) : Making their own way: Narratives for transforming higher education to promote self-development. Sterling, VA: Stylus.
- Gass, M. (2003) : Kurt Hahn Address 2002 AEE International Conference. Journal of Experiential Education, 25 (3) , 363-371.
- Hodge, D. C., Baxter Magolda, M. B., & Haynes, C. A. (2009) : Engaged Learning: Enabling Self-Authorship and Effective Practice. Liberal Education, 95 (4) , 16-23.
- Kegan R. (1994) : In over our heads: The mental demands of modern life. Cambridge, MA: Harvard University Press.